

地域住民の公民館への参加のプロセス

The Process of Participating Kominkan Activities

松 本 大*

Dai MATSUMOTO*

要 旨

本研究の目的は、弘前市内地区公民館において住民がどのような過程で公民館への参加を深めるのか、その過程でいかなる価値や行動を創発するのかを実証的に明らかにすることである。弘前市内地区公民館の「積極的利用者」30名に半構造化インタビューを実施し、M-GTAを用いて検討した。その結果、住民にとって、地区公民館は地域の会合や行事等で日常的に使用される施設ではあるが、講座・サークルや運営委員等として主体的に公民館に関わるようになってはじめて、公民館は単なる施設ではなく「公民館」として認識されるようになっていくことがわかった。つまり公民館への参加を深めるうえで、「公民館観」の変容が重要であることが示唆された。また、「公民館観」が変わり公民館への参加を深めるにつれて、社会関係資本に相当する価値や行動が形成されることも確認された。

キーワード：公民館、参加、公民館利用者、正統的周辺参加、社会関係資本

1. 問題の所在

本研究の目的は、地域住民が公民館への参加を深めていく過程を描写することである。

公民館と地域住民との関係についてはさまざまに研究が進められてきている。管見では、社会学的な観点も用いながら地域社会における公民館の機能やそれを成立せしめている地域の構造や住民の活動を描くアプローチが多いように見える。例えば遠藤千恵子は、地域における社会教育実践の構造において公民館や社会教育労働が果たす機能を分析している¹⁾。近年では東京大学の飯田市民館調査のなかで、地域社会において公民館を軸に形成される重層的な地域活動の構造が明らかにされている²⁾。しかしこれらの調査は、地域社会における公民館活動を構造化して把握することに成功しているが、一人ひとりの住民の公民館への参加の過程を描くことは課題として残されているといえる。

もちろん、住民個人が公民館での学習をとおして力をつけていくという事例はこれまでも数多く報告されている。ただし、「講座をとおして住民が力をつける」という報告の場合、講座それ自体に焦点があてられることが多い。住民が公民館における複数の講座やイン

フォーマルな関係性にどのように関わっていくことで公民館そのものに深く参加するようになるのか、「公民館それ自体」の「常連」にどのようなようになっていくのか、住民個人あるいは公民館全体を視野に入れた分析は十分に行われているとはいえない。

以上の問題関心から、本研究は住民が公民館活動への参加を深めていく過程をとらえる。住民は、どのような過程で公民館活動に関わり、いかに「常連」になり、その学びと参加のプロセスのなかでいかなる価値や行動を形成しているのかを描く。

2. 調査の方法

弘前市における12の地区公民館全てを調査対象とした。これらの公民館利用者のうち、本研究が焦点をあてたのは「積極的に」公民館を利用している者である。なぜなら、積極的な利用者に焦点をあてることによって、公民館に十全的に参加する過程をより明確に探究できると考えたからである。

この「積極的な利用者」については、各館に「よく公民館を利用している人」「お勧めの人」ということで3名前後紹介して頂いた。最終的には、30名のイン

* 弘前大学教育学部学校教育講座
Department of School Education, Faculty of Education Hirosaki University

インタビューを実施することができた。調査協力者30名のうち男性9名、女性21名である。年齢は、40代5名、50代3名、60代10名、70代10名、80代2名であった。30代以下の調査協力者がいないのは、12の地区公民館の特性による。弘前市では地区公民館は郊外の農村地帯や住宅地に設置されている。こうした地区では、高齢者の利用がもっとも多くなる。今回の調査は、地区公民館における「積極的な利用者」に焦点をあてるものであるため、調査協力者の年齢層が高くなっている。

インタビュー調査は2015年2月に実施した。インタビューの場所は、各公民館であった。インタビューは原則として筆者が担当したが、例えば「同じ施設内で同じ時間帯にインタビューしてもらいたい」という要望があった場合は、筆者1人では実施できないため、学生に協力を依頼した。インタビューの内容は、調査協力者の承諾を得て録音した。インタビュー時間は調査協力者1人あたり、30～40分であった。

半構造化インタビューを実施し、「現在、公民館をどのように利用しているのか」、「この公民館を利用するようになったきっかけ何か」、「この公民館を利用して良かったことは何か」、「公民館での活動をとおして、自分の生活について何か変化はあったか」等の内容について質問をした。録音したインタビューの内容は、全て逐語録に起こしてインタビューデータとし、分析のための資料とした。

調査協力者への倫理的配慮として、(1) インタビュー内容の録音と逐語録に起こすこと、(2) データは個人や団体が特定されないように注意すること、(3) 研究結果は口頭発表や報告書等で公表されること、といったことをインタビュー実施時に説明し同意を得た。

分析については、修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いることで、公民館利用という学習プロセスを把握することを目指した。インタビューで得た言語データをもとに、分析ワークシートを作成し概念を生成しつつ、カテゴリーを定めた。

3. 結果と考察

分析の結果、住民が公民館への参加を深め、特定の価値や行動を獲得するプロセスについて、7のカテゴリーとカテゴリーを構成する26の概念が抽出された。7のカテゴリーの内訳は、【I. 近所づきあいの停滞】【II. 公民館への参加のはじまり】【III. 公民館への参加の深まり】【IV. 公民館観の変化】【V. 公民館の価

値への気づき】【VI. 公民館の課題への気づき】【VII. 公民館への参加の深まりがもたらす価値と行動】である。これらを図示したものが、図1と図2である。図をもとに、調査結果の概要を次のように示すことができる。以下、カテゴリーを【 】, 概念を[]で示す。

まず、公民館利用者は地域社会のなかでどのように過ごしているのか。彼らにとって【I. 近所づきあい】は[1. 回覧板をまわす]程度、あるいは[2. 挨拶や世間話をする]程度であり、決して活発な近所づきあいがあるというわけではない。地域社会において役職の担い手も少ないため、彼らはやむを得ず[3. 町会での役職]を引き受けることになる。町会などで役職を担うと、会合で公民館を利用することが多くなる。そのなかで、ある者は公民館の[7. 運営委員]に選ばれたりする。また、近所づきあいの状況が活発でないために、地域での交流や活動を求めて講座やサークルに参加する。

このような背景のもとで、公民館利用者は大きく4つの誘因で公民館に関わりはじめる。1つは[4. 講座・サークルへ関心]からの参加である。2つめは[5. 社会参加・地域貢献への関心]からの参加である。3つめは、[6. 人に誘われて参加]であり、さらに4つめとして[7. 公民館の運営委員になる]ことをきっかけとして、公民館活動に参加する。

このようにして、住民は講座・サークルや運営委員として公民館活動に関わるようになる。重要なのは、ここでの学習や活動の経験が[8. 楽しい]ものとして経験されているということである。その[楽しさ]は、公民館での学習や活動が“人との交流”を重視し“競争を目指さない”ところから生じている。しかしこれは、学習に緩さや甘さがあることを意味していない。利用者は一定の目標をもち、張り合いをもって活動している。その目標となっているのが[12. 公民館祭り]である。公民館祭りにおける学習成果の発表や展示が、高い専門性ではなく“人との交流”を重視する公民館の活動に張り合いとやりがいを生みだしている。

[12. 公民館祭り]は、弘前市において地域社会における一大行事になっている。どの公民館においても多くの住民が参加している。このとき公民館利用者は、“スタッフ”や“出展者・発表者”として、つまり住民をもてなす側として主体的に公民館祭りに関わることになる。ここでの成功体験が、利用者自身の【IV. 公民館観の変化】へとつながっている。

また、このような講座・サークルへの参加、運営委

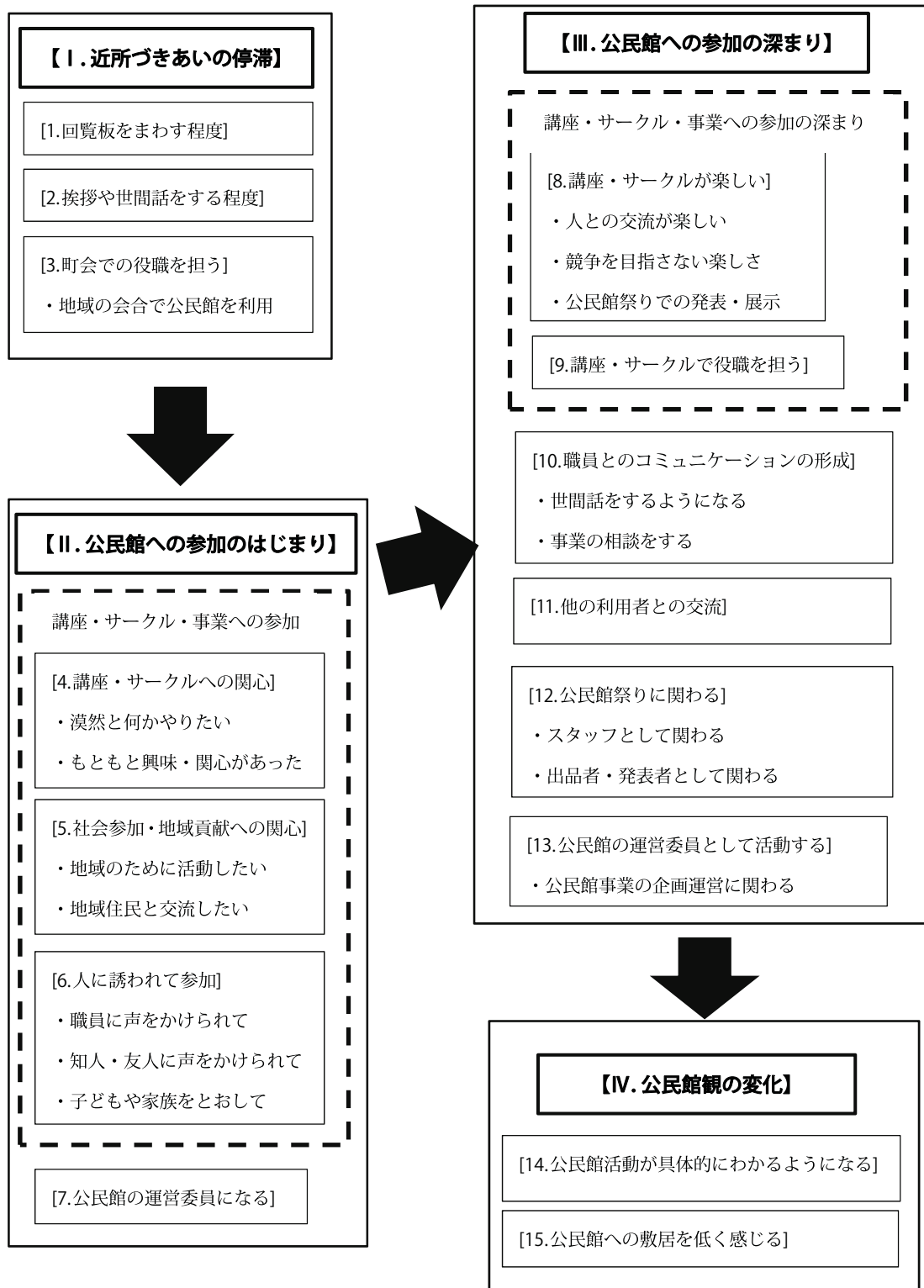


図1 公民館への参加のプロセス（公民館観の変化まで）

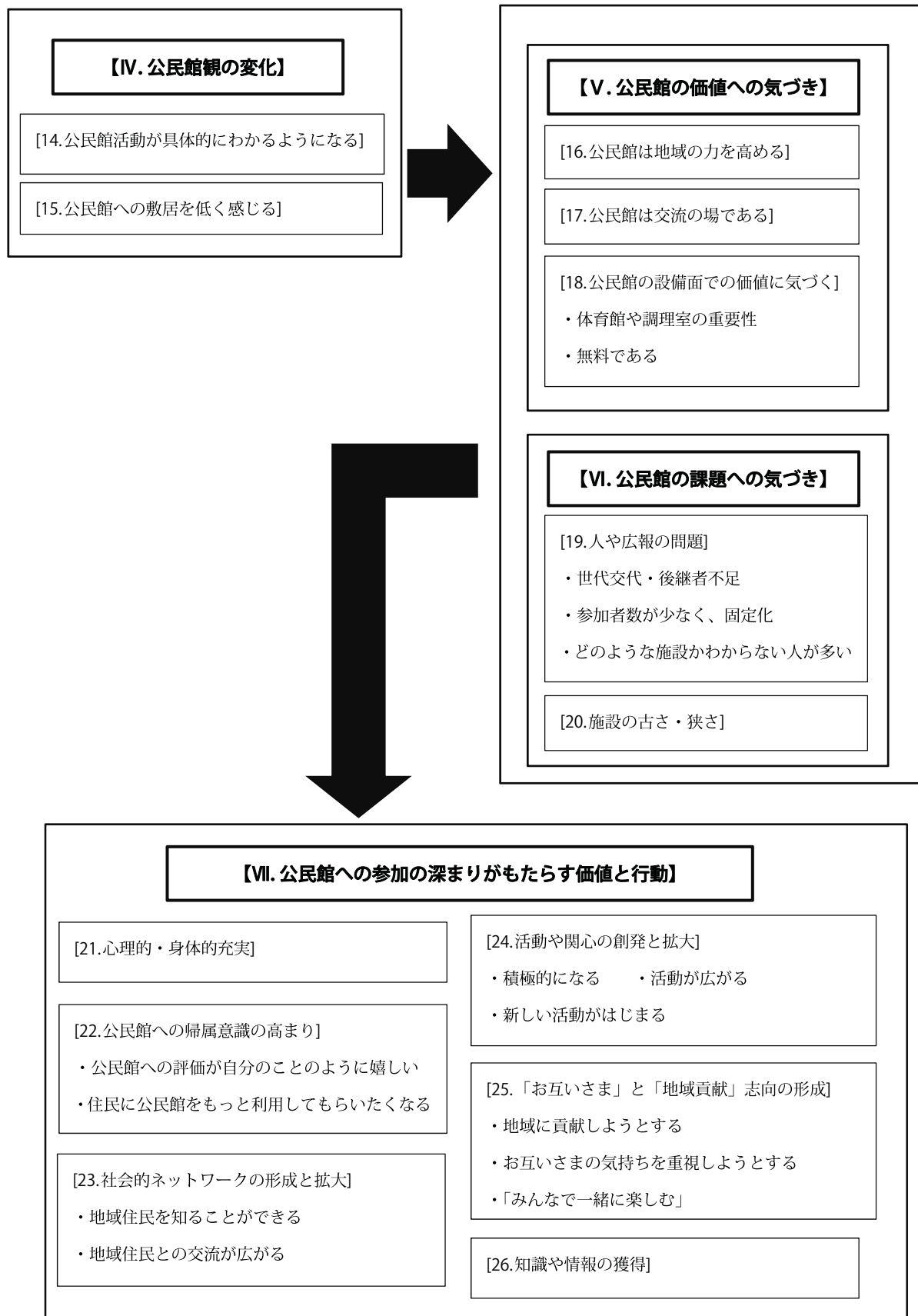


図2 公民館への参加のプロセス（公民館観の変化から）

員としての関わり、さらには公民館祭りをとおして、[10. 職員とのコミュニケーション]も深まることになる。このとき、職員の側から積極的に利用者に声をかけるという支援が行われている。次第に利用者は、職員と“世間話”のような打ち解けたコミュニケーションをとることが可能になる。特に用事もないのに事務室でお茶を飲んだり雑談をするという現象がみられるようになる。このようにして利用者は、公民館を行きやすく「敷居が低い」と感じるようになる。そして職員とコミュニケーションを十全にとることができるようになる、[11. 他の利用者との交流]も促進される。

このようにして、利用者がもともと抱いていた【IV. 公民館観】が変化してくる。公民館とはどのような施設なのか、どのような意義をもつ施設なのか具体的に[14. わかるようになる]。

では、【IV. 公民館観】が変化したあとで、利用者は地域における【V. 公民館の価値】についてどのように認識するようになるのか。1つめに、[16. 公民館は地域の力を高める]施設であることがみえてくる。2つめに、公民館は地域社会において[17. 交流の場である]ことが意識されるようになる。そして3つめに、[18. 公民館の設備面での価値に気づく]。

一方、公民館について関わりを深め、公民館のことがわかるようになるということは、【VI. 公民館の課題を認識するようになる】ことでもある。[19. 人や広報の問題]や[20. 施設の古さ・狭さ]が課題として認識されている。

以上のように参加を深めることで、利用者にとって特定の【VII. 価値観や行動】が創発されている。1つめに[21. 心理的・身体的充実]である。2つめに、[22. 公民館への帰属意識の高まり]である。“公民館への評価が自分のことのようにうれしく”なったり、“住民に公民館をもっと利用してもらいたくなる”。3つめに、[23. 社会的ネットワークの形成と拡大]である。地域住民とのネットワークが広がる。4つめに、[24. 活動や関心の創発や拡大]である。“積極的に”なったり、“活動が広がったり”、“新しい活動”がはじまったりする。5つめに、[25. 「お互いさま」と「地域貢献」志向の形成]である。“地域に貢献”しようとしたり、“お互いさまの気持ちを重視”しようとしたり、“みんなで一緒に楽しむ”ことを重視するようになる。そして6つめに、公民館利用をとおしての[26. 知識や情報の獲得]である。これら6つは、公民館利用によって形成された社会関係資本であるといえるだろう。

以下では、各カテゴリーとカテゴリーを構成する概念について説明していく。

4. 公民館への十全的参加の過程

4-1. 近所づきあいの停滞

弘前市における地区公民館の利用者は、地域において住民同士の交流がほとんどないと意味づけているようである。具体的には、[1. 回覧板をまわす]程度や[2. 挨拶をする程度]という意味になる。公民館を積極的に利用しているからといって、日常的な地域での住民同士の交流が活発であるわけではないということが示されている。逆に言えば、住民同士の交流が活発でないからこそ、公民館利用者たちは、公民館という場における交流を求めているといえよう。

このように全般的に地域での近所づきあいが低迷しているなかで、公民館を積極的に利用する者は、地域での役職を担うことが多いようである。結果的にこのように役職を担うことが、公民館運営委員への就任にもつながるなどし、公民館の利用に結びついていく。

さらに地域において役職に就くと、会合で公民館を利用する機会が多くなる。しかし後で触れるように、たとえ会議で公民館を利用したとしても、実際に自らが講座・サークルなどの利用者として主体的に関わらない限りは、公民館が「公民館」として認識されず、単なる会議室としてしか見なされない。

4-2. 公民館への参加のはじまり

公民館活動に参加するきっかけは大きく4つに分類できる。1つめは、講座やサークルの内容に関心をもって参加するというものである。しかしこれは、「何かをやりたい」という思いはありつつも、必ずしも講座・サークルの内容に明確な興味・関心を持っているわけではなく、「定年退職後に何か趣味のようなものを作りたい」「体を動かしたい」といった抽象的な思いをもって、講座・サークルに参加しようとすることを意味している。

2つめは、講座・サークルにおいて趣味やスポーツといった内容面を学習したいという動機ではなく、「地域のために何かしたい」という思いから公民館活動に参加しはじめる場合もある。さらに、「地域づくり」のためというより、自身の「友だちづくり」という住民交流を目的として、公民館活動に参加するという動機から参加する場合もある。

3つめに、職員や知人・友人に直接声をかけられる

ということも、公民館活動に参加するきっかけとなっている。ただし、職員が声をかける場合、基本的に職員は「公民館にすでに来ている利用者」に声をかけるわけだから、職員による呼びかけが公民館への「最初の一步」となるというわけではない。地域の会合などで公民館を何度か利用している方に職員が声をかけるということが、本格的な公民館参加の後押しになったという意味である。

4つめに、公民館の「運営委員」になることが公民館活動への参加のきっかけとなることもある。弘前市の場合、町会長や育成委員などの役職に就くと、そのまま地区公民館の運営委員を担うことがある。そうすると、自身は公民館の講座やサークルに参加していかなくても、運営委員として公民館事業の企画や手伝いにも関わりはじめることになる。

4-3. 公民館活動への参加の深まり

①講座・サークルが楽しくなる

公民館の積極的利用者たちは、講座・サークルに参加することを「楽しい」経験として意味づけている。では、講座・サークルに参加することの「楽しさ」とは何か。1つには、講座・サークルでの活動をとおして、参加者同士の交流が活発になることである。特に指摘されていたのは、お昼に料理を持ち寄り、参加者で昼食をとったり、料理を教え合うことだった。

さらに、公民館における講座・サークルでの学習が、高度な専門性の獲得を目指しているわけではないことも「楽しさ」の誘因となっている。学習した内容をお互いに発表することはあるが、それほどこかの大会やコンテストでの優れた成績を目指しているわけではない。仲間内で批評しあい、仲間との交流のなかで学習が進められることを意味している。

事例1：皆さんでわいわいがやがや作品を作って皆さんで発表したりして。「ああでもない、こうでもない」って楽しんでるということです。

しかし、単に仲間内だけの「閉じた」学習をしているわけではない。多くの講座やサークルでは、学習成果を「公民館祭り」において発表したり展示したりしている。このことが、公民館における講座・サークルを、単なる「習い事」とは異なるものになっているように見える。つまり学習は、たえず地域住民への還元という目標を意識しながら進められる。利用者の多くは、公民館祭りのために練習を重ね、自らが発表・展示することを楽しみにもしている。

事例2：文化祭で作品展ありますんでね。そうすると1年の目標ができますよね。で、上手くいったりしてこうお客さんに、たくさんの方々に観て頂くんですよ。そうすると、そこで褒められた人は嬉しいでしょ。人間ですね。そうするとそれが次の励みになって、じゃあ来年もまたっていうふうに。

事例7：公民館祭りが近いとなれば、もうみんなして練習に来てまして、公民館祭りを盛り上げようとして練習したりして。みんな楽しく使ってます。

②公民館の運営委員になる

積極的利用者は、やがて公民館の運営委員を担っていく。運営委員になる方法は2つある。1つは、すでに指摘したように、町会等での役職を担う立場から運営委員に就任する方法である。もう1つは、公民館での講座・サークルの代表という立場から運営委員になる方法である。いずれにせよ、公民館の運営委員になるということは、受動的な単なる「利用者」としてではなく、「事業の企画・実施者」としての立場から公民館に能動的に関わることを意味している。

③公民館祭りに関わる

公民館祭りでは、運営委員だけではなく、公民館の講座参加者も、公民館祭りの際に「スタッフ」として手伝うことが多いようである。これは個人的に声をかけられることもあれば、教室として公民館の手伝いをするのが通例となっている場合もある。具体的には、当日の料理作りなどの業務を担っている。

「スタッフ」や「出品者・発表者」など、自らが当事者として関わるのが、積極的利用者の公民館祭りへの評価を高めている。この評価は、1つには、公民館祭りが地域住民の「つながり」を生んでいるというところから意味づけられている。このことには、公民館祭りをとおして自らのネットワークも広がっているということが関連しているといえる。もう1つには、実際に公民館祭りに地域住民が多数参加していることを、スタッフとしてかかわることを通して直接的に感じるという意味である。

事例10：1年に1回の公民館祭りで、手芸なら手芸の作品の展示、踊り習ってる方は発表会、それから女性部がお漬物出したり、自分の畑でとれたものを出したりっていうのがあるので、やっぱり知らない地域の人たちともそういうふうにして、知ることができるっていうか。他の方はこういう活動をやっているんだっていうのが分かるので。

④職員とのコミュニケーションの形成

このようにして、[8. 講座・サークルが楽しい]と感じるようになり、また[12. 公民館祭り]に関わったり、[13. 運営委員として活動]するようになるにつれて、利用者と職員との関係性も深まっていく。このとき職員は、事務室でお茶を飲むように声をかけたりすることで、利用者と打ち解けたコミュニケーションをとることができるように、積極的に支援している。次第に、利用者と職員は何気ない世間話ができるようになる。

事例6：帰る時でも、どうぞどうぞお茶飲んでいきますかかっていつもこう声掛けてくださいます。

事例16：1回でも2回でもここの公民館の行事に出たから、中にいる館長さんが、「今、あれお茶っ一杯飲んでいかないか」とか、「どーも」ってまわったりするから。それからこう、なんて言えばいいべ。使わさったっていえばおかしいけど、足運んだっていえばおかしいけども。

4-4. 公民館観の変化

このように住民が公民館への参加を深めるプロセスにおいて中心的な役割を担っているのが、【IV. 公民館観の変化】である。利用者は、公民館に主体的に関わるようになるにつれ、公民館を「公民館」として認識するようになるといえる。誰でも利用でき、手続きも容易であり、多くの人が利用している施設として、公民館のイメージが新しく形成されるようになる。

事例4：初めは限られた人しか来られないと思っていた。けど入ってみたらそういうことじゃなくて。最初は、入っていいのかなと思ったんですけど、いろんな人に声をかけてもらって来るきっかけができたので。

事例10：昔は公民館ってこういうことやっているとは思わなかったですね。公民館って知らなかったですね。公民館って何やってるのか、それこそ知らなかったですね。

さらに、利用者は[15. 公民館への敷居を低く感じる]ようになり、「公民館に行きやすい」と考えるようになる。

事例6：やっぱり、特別用なくても、例えば今日館長さんがいる日だなと思うと、つい、行ってみようと思う。館長は「いつでも遊びに来てください」と、ほんと親切に言うもんですから。

4-5. 地域における公民館価値への気づき

こうした【IV. 公民館観の変化】は、公民館をどのような価値をもつものとして認識する方向で作用するのか。地域における公民館の意義への気づきは大きく次の3点で形成・再形成される。1つは、公民館を

[16. 地域の力を高める]施設であると評価するようになる。具体的には、楽しい事業をとおして人が集まり、地域が活性化しているということを意味している。

事例12：地域のためにさ、活力与えてる場だと思うよね。ここがなければ誰もさ、集まってきて何かやるとかそういうのありませんので。

事例16：ここで活動あれば、この地域は皆生き活きするからね。ここから皆発信するからって何でも呼びかければ集まるよね。だから、公民館が大切な所だと思う。

2つめ、公民館が地域住民の社会参加の場であり、多くの人にとっての気楽な[17. 交流の場]であり居場所であるということ認識するようになる。ある利用者は「無くなると困る、空気みたいなもの」と表現している。

事例2：地域づくりだとか仲間づくりの拠点になる場所じゃないかって。そうすると、ここは一種の地域のたまり場になれば最高じゃないかなって思っているんです。

事例25：やっぱり中心になっているんじゃないかな。もちろん学校もあるけど、ここが違う意味でまた、中心になると思います。無ければ困る。空気みたいな感じで。

3つめは、[18. 公民館の設備面での価値]である。公民館の設備が整っていることが、地域住民の参加につながっていると意味づけられるようになる。また、公民館利用が無料であることによって、公民館が利用しやすくなり人も集まりやすくなることを評価するようになる。

4-6. 公民館の課題への気づき

公民館への参加が進み、公民館に関する理解が広がってくるにつれて、公民館の課題についての気づきが形成されるようになる。1つは、[19. 人や広報の問題]である。具体的には、世代交代が進んでおらず、後継者が不足していることが認識されるようになる。また、利用者自身がそうであったように、実際に足を運ぶことによって初めて「公民館とはどのような施設なのか」がわかるようになるにもかかわらず、まだ多くの住民が公民館を利用していないことを残念に思う気持ちが形成されるようになる。

事例14：たぶん来たくてもどうすればいいのかわかっていう人がまだいっぱいいると思うんですよ、公民館の運営自体も分からないお母さんたちもいっぱいいるし。でそれを人伝いででも伝えることができればって。もっと利用してくれるんじゃないかなと思うんですけど。

また、[20. 施設の古さ・狭さ]も課題としてとらえられるようになる。弘前市内の多くの地区公民館は、古い建物である。特に、バリアフリーが未整備であることが指摘されている。

4-7. 公民館利用が育む価値と行動

①心理的・身体的な充実

さて、このような公民館への参加の深まりは、利用者いくつかの価値観と行動を創発している。1つは[21. 心理的・身体的な充実]である。これは、公民館における講座・サークルなどに参加し利用者同士が交流することによって、利用者が「前向き」に「元気」になることができたり、「生活に張り」を感じるができるようになったりするということである。

事例7：むしゃむしゃしてるときかでも、ここに来て皆さんと話し合いをしたりすれば、みんな楽しくすっきり忘れて。

事例13：ここは私の別荘なのさ。うん、楽しいもの。ここに来てお友達もいっぱいできてさ。楽しいんだって。腹立って帰る事無いもの。家にいれば黙って何か縫ってるとかさ、それしかないじゃん。いっぱい笑って帰るんだって。腹立つこと無いって。

②公民館への帰属意識の高まり

公民館への参加が深まるにつれ、[22. 公民館への帰属意識]も高まる。公民館評価を自らのことのように関連づけて一喜一憂するようになる。さらに、公民館に価値があると考えからこそ、地域の住民にもっと参加してもらいたいという思いが強くなる。

事例7：自分としても嬉しいですよ。『この公民館そんなこと』って言われれば、ちょっとしゅんってすんだけど、良いこと言われればすごい私としても職員でなくても楽しい。嬉しくて。

事例9：まだまだ利用しているのは全体の一部だと思うんですけど、それがどんどん地域にも広がっていけばいいのかなって思いますけれど。

③社会的ネットワークの形成と拡大

公民館利用は、自分の住んでいる町会以外の地域住民と知り合う可能性を広げる。つまり地区公民館とは、地区内のさまざまな町会から住民が集まり、出会い、新しい関係性が生まれる場なのだといえよう。「町会では出会わないような人に出会える」と語られる。

事例9：私は他の町会の人とか全然知らない訳ですけど、ここにいることによって知り合いになれたっていうので、本当に交流の場です、公民館はね。

事例18：何ていうんだらうな、知らない人でも顔見知りになるっていうと変なんですけど、何回か見ると、「ああ、あの人はどここの人で」とか聞いたりとか。何か幅が広がる。何ていうか。出会わない人に出会える？出会わない人に出会える。

また、公民館を利用することによって、単に町会外の人びとと出会うだけではなく、より関係性を深めることができる。相談に乗ってくれる友人が出来たり、このネットワークを土台として、活動がさらに発展したりする。

事例4：いろんな世代の人と関わることが多くなって、お年寄りのイベントとか子どものイベントとか顔出して、お話しすれば、「おばあちゃんはどここの人のおばあちゃんだ」とか話も盛り上がるし。顔が広がるというか。意外と近所では顔はあいさつ程度で、近所の人の顔しか覚えてないですけど。

事例11：知人が増えるっていうんですかね？知り合いが増えるっていうんですかね？そしたらそこに信頼関係も出来てきますよね。人の輪が広がったっていうか。そしたら活動はしやすいですよ。

④活動や関心の創発と拡大

これは、公民館での参加が深まるにつれて、より積極的に行動することができるようになったという意味である。インタビューに応じてくださった調査協力者の方は、この変化を、「何かをやりたい」から「もっとやりたい」への変化として指摘している。

⑤「お互いさま」と「地域貢献」志向の形成

公民館への参加が深まるにつれて、学習した成果を「地域に還元していこう」という意欲が生まれるようである。また、「地域をもっと良くしたい」という意欲も生まれる。これは、公民館という施設が地域社会と密接に関わっており、公民館に関わるなかで地域住民との関係性も深くなるからであると思われる。

事例13：私は町内に帰ってから、(近所の高齢者の方々に)「これ、公民館で作ったんだよ」って作って持ってって、食べさせたりする。

事例19：地域にまた戻してやれるっていうのがいいんじゃないかなって私はね。ただ自分で覚えただけでなく、覚えたものを、また地域の方たちに指導できるっていうのは。

さらに公民館利用をとおして、「お互いさまの気持ち」が重視されるようになる。「自分ひとりが良けれ

ば良い」ではなく、学習成果を周囲に還元したり、お互いの支えあいを意識するようになる。公民館で生じる「楽しさ」を、自分ひとりで閉じるのではなく、皆で共有しようという気持ちも生まれてくる。

事例9：やっぱり自分のことだけを考えて行動するということがなくなったというか、あるだろうけど常にみんなのことを考えながら行動するようになった。

事例14：以前までは、誰もあまり接触しなくてもいいや、って自分で子育てして、まあ保育園とかに入っても、そこはそこで収めておいてみたい。あまりこう表に出なかったんですけど。結局小学校に入って役員をやった、したら周りに、もっと出た方がいいよって言われた一言が残ってて。もっと表さ出ろって。で、そのつながりで公民館をして。でそれで楽しいことあるなってとかいろいろ勉強になるとか。なんか人も覚えたとか。そういうのが一番大きいのかもしれない。楽しいことはみんなで行おうよって。

⑥知識や情報の獲得

これは、講座やサークルをとおして知識を獲得することができるということの意味している。さらに興味深いのは、利用者は、「講座で獲得する知識」として、料理の持ち寄りなどでの利用者間の相互行為のなかで行われる、料理、漬物、畑、家庭あるいは地域社会など、身の回りの生活や地域に関する情報交換を重視しているということである。これらは「知識や情報の獲得」というより、地域で生きる「知恵の獲得」としてもよいかもしれない。

5. 総合考察

5-1. 考察とまとめ

本研究は、弘前市内地区公民館において、利用者がどのような過程で公民館活動への参加を深めるのか、その過程でいかなる価値や行動を創発するのかを実証的に明らかにするものである。その結果、利用者は、[講座・サークルの楽しさ]、[職員とのコミュニケーション]、[公民館祭りへの関わり]、[運営委員としての活動] などとおして、公民館への参加を深めていた。これらの参加をとおして利用者の【公民館観】が変容する。この【公民館観】の変容が、利用者の特定の【価値観や行動】を創発していた。

こうした公民館利用をとおして創発される【価値観や行動】として、本研究は次の6つを明らかにした。すなわち、[心理的・身体的充実]、[公民館への帰属意識の高まり]、[社会的ネットワークの形成と拡大]、[活動や関心の創発や拡大]、[「お互いさま」と「地域

貢献」志向の形成]、[知識や情報の獲得]である。この6つは、「社会関係資本」に相当するものであるといえよう。つまり本研究は、公民館活動への参加の深まりをとおして一定の社会関係資本が蓄積されることも示唆している。

次に、本研究の結果得られた主たる知見を3点にわたり指摘する。

第1に、地域社会において公民館がどのような社会的意味をもつのかという点についてである。本研究は、公民館活動が住民の関係性や行動を発展させる力を持つことを改めて確認させる。このことは、公民館活動が「地域づくり」に結びつくということを示している。例えばインタビューからみえてきたのは、現在「近所づきあいが低迷」しているなかで、公民館が「各町会にはない新しいネットワークの場」になっているということである。さらに今回の調査は、公民館を利用することによって、利用者は互助や地域貢献を重視するようになり、社会的ネットワークの拡大のなかで行動が創発されていくことを示唆している。

第2に、公民館において参加を深めていく過程を明らかにできたことである。ここでいう「参加の深まり」とは、公民館という実践コミュニティに十全的に参加していく過程を意味している。単に部屋を借りて施設を利用するという意味ではなく、「公民館コミュニティ」の成員としてのアイデンティティを深め、成員と相互作用を重ねながら、公民館の運営それ自体に実質的に関わっていく過程を意味している。

本研究は、この十全的参加の過程において、【公民館観】の変容が鍵を握ることを示すことができた。実際、弘前市内地区公民館では、地域の会合で公民館が頻繁に使用されている。住民の多くは何らかの機会に公民館を利用している。しかしそうした「地域の会議室」としての利用は、住民の公民館という実践コミュニティへの十全的参加に結びついていない。公民館を「公民館」として認識してもらえるようになることが重要なのである。

第3に、ではどのようにしてこの【公民館観】が変容するのかということである。次の3点を指摘したい。1つめに、講座・サークル、公民館まつり等の公民館活動に、「楽しみ」をもって関わるのが重要だということである。今回明らかになったのは、利用者は、「楽しみ」のある活動のなかで、知らず知らずのうちに【公民館観】を学んでいたということである。公民館活動を「楽しむ」なかで、自ら、そしてお互いに、身につけたのである。

2つめに、【公民館観】が変容し、公民館を「単なる施設」としてではなく「公民館」として認識するようになるためには、公民館活動に「主体的に」「持続的に」関わることが重要である。単発の事業あるいは会合に「お客さん」として参加しただけでは、公民館を「公民館」として認識するに至らない。本研究の例でいえば、公民館運営委員として公民館事業の企画・実施に関わったり、講座・サークルで役職を担ったり、職員とのコミュニケーションを深めるなかで、利用者は主体的・持続的に公民館に関わるといえる。

3つめに、職員の支援の重要性が示唆された。インタビューからみえる職員の支援とは、利用者が公民館に出入りしやすく、居やすくなるための支援である。それは、公民館というコミュニティに利用者がアクセスしやすくするための支援といえる。つまり住民が公民館の「常連」になるにあたっては、個々の講座や事業の運営よりむしろ、例えば事務室での世間話など、公民館そのものが利用者の「居場所」となるための支援が重要であるということである。

5-2. 今後の課題

本研究から示唆される今後の課題を、次の3点にわたり指摘する。

第1に、本研究はあくまで利用者の参加の深まりに焦点をあてていた。しかし「利用者の参加の深まり」と「公民館コミュニティの発達」は必ずしも相関するわけではない。つまり今回の調査は利用者個人の参加に焦点をあてた一方で、公民館という実践コミュニティそれ自体の変容については分析したわけではない。弘前市内の各地区公民館を広く調査するという調査の特性上、分析の射程に限界があったといえる。今後は実践コミュニティそれ自体を調査していくことが求められるだろう。

第2に、年齢階層に注目した分析も必要となるだろう。本調査では、調査協力者30名中60代・70代が20名である。30代以下の世代にインタビューを実施することはできなかった。年齢階層に注意する必要があるのは、「職員とのコミュニケーション」が関係すると思われるからだ。事務室でお茶を飲みながら世間話をする「職員とのコミュニケーション」は、利用者が公民館に参加しやすくなり「公民館観」の変容をもたらす

誘因となる。職員もまた中高年齢層が多い。世間話しやすい関係性がもともと存在しているといえる。しかし、例えばこれが若い利用者であればどうなるのか。「職員とのコミュニケーション」の取り方も、中高年世代とは異なる方法でとられる可能性がある。

第3に、実践的には、本研究は【公民館観】の変容が住民の参加の深まりや社会関係資本形成の鍵となることを示唆しているが、この【公民館観】は、「講座・サークル」「公民館祭り」等の具体的な活動のなかで、利用者が主体的に、「楽しく」、「持続的に」関わるときに変容していた。つまり公民館にとっては、「楽しさ」と「持続性」の両方をもった利用者をどのように増やすことができるのかが必要になる。

現状において、「楽しさ」を重視した単発の事業の利用者、あるいは地域の会合で「持続的に」利用している利用者、というどちらか1つに重点をおいた利用の現状がある。これをどのように合体させていくのが課題である。

例えばインタビューのなかでは、「若者が少ない」「後継者がいない」といった切実な声もあった。しかし公民館は、例えばPTAの会合などで使用されることが多い。地域において、何らかの形で公民館を利用している住民は少なからず存在している。しかし彼らの多くにとって、まだ公民館は「単なる施設」でしかない。公民館を「公民館」として認識してもらえるようになることが重要なのである。そしてその認識は、繰り返しになるが、実際の公民館活動をとおして経験的に学ぶことで形成されるといえる。

付記

本研究は、弘前市「平成26年度弘前大学への地域課題研究委託事業」の助成を受けたものである。

註

- 1) 遠藤知恵子『現代の公民館—地域課題学習と社会教育施設—』高文堂出版社、1995年。
- 2) 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室飯田市社会教育調査チーム『開かれた自立性の構築と公民館の役割—飯田市を事例として—』東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室、2011年など。

(2016. 8. 8 受理)